

．．．．． 彼はエレベータの『B2』と書かれたボタンを押した。この建物は地上三階、地下二階まであるようだ。

先程とは打って変わって二人とも急に無口になった。エレベータは地下二階につき、扉が開いたと同時に異様に冷たい空気が襲ってきた。坂本晃三は携帯電話を取り出し、「明かりを点けてくれ」と喋っている。

水銀灯のような照明が点灯し、周囲がはつきりと見えたとき僕は驚いた。

「なんですか。これは．．．．」

高さ三メートルくらいあろうか、直線のトンネルが遙か彼方まで続いていた。

「ここは、まだ公にはなっていないですね。夏岡さんなら大丈夫だと思います、ご案内しているのです。これから見るものをよく目に焼き付けておいてください」

僕を試しているような視線で言った。坂本晃三の後に続きトンネルを進んで行く。

二十分程度歩いたその時、目前に大きな鉄製の扉が現れた。坂本晃三はズボンのポケットをまさぐり、数本の鍵を取り出した。その中で一番大きな鍵を選び僕に渡した。

「こいつは、そのボックスに暗証番号を入力してから二本の鍵を同時に回すことで解錠されます」

坂本晃三は独り言のようにブツブツいいながら、ボックスを開けた。

「まずは・・・番号を入力して・・・いいですか。ワン、ツー、スリーで右に回してください。いきまますよ、ワン、ツー、スリー」

僕は言われた通りに鍵を回した。あっけなく解錠された扉を坂本晃三は左手で開ける。

その先には、天井がアーチ状をした通路が開けた。明らかに今通ってきたトンネルとは時代が異なっていることが素人の僕にも分かった。

床は石畳になっており、壁面にはなにやら彫刻が施されているようだ。

僕はこれが何なのか全く理解できていない。

「これは何かのアトラクションですか」

僕は半分本気で言ってみた。

「面白いお方だ。もつと面白いアトラクションがこちらにあります。奈良時代に造られたね」

坂本晃三はおどけながら、僕をさらに先へ進むよう促した。

十五分は歩いたような気がする。するとドーム状の部屋に辿り着いた。直径七メートルくらいはありそうだ。周囲の壁は所々色褪せているが、どうやら金箔が貼付けられているようだ。

「ここは、ちょうど大仏殿の真下なのです。もう少し詳しく言いますと、大仏様が座っている蓮の座の下に来ているのですよ」

こんなことは初めて聞いた。大仏様の真下にドーム状の部屋があるなんて。

「あそこをご覧ください。小さな扉があります。明治時代から研究されているのですが、依然

として何のための扉かは全く分かっていません。他にもちよつと信じられないようなものまで見つかっています」

僕はその扉を見た瞬間、気絶しそうになった。

そう、この扉の向こうには未来があるのだ。この話を誰から聞いたのか必死で思い出そうとしたが、無理だった。

しかし、僕は意外と冷静な自分に気付く。

「信じられないようなものも見つかったというのはどういうものですか」

坂本晃三は首を振って言った。

「いずれお話いたしましたよ」

僕は頭が痛くなってきた。吐き気もする。

「どうですか。夏岡さん。今までご覧いただいたものに心当たりがおありではないでしょうか。自分に正直になって、全てを私たちにお話いただけませんか」

この人は一体何を言っているのだろうか。僕は訳が分からなくなってきた。今見たものは本物ののだろうか。

でも、歩いた距離や方角からすると確かにここは大仏殿の真下であるようだ。それに誰が何のためにこんな大掛かりな大道具を作るのだろうか。

壁面から天井の曲面にかけて見事なまでに組まれた焦げ茶色の木の柱は、明らかに現代のも

のではないことがわかる。

頭痛が更にひどくなる。ずっと前にこのような場所で意識を失ったことがあるような気がする。夢で見たのかも知れない。

そうだが、このまま倒れてしまった方が楽だと思う。

「夏岡さん。あなたは今、何かを思い出そうとしています。しかし、それはとても重大なことであなたの手に負えるような代物ではない」

坂本晃三はあの扉を見ながら続けた。

「夏岡さん、あなたは自らの記憶をガードしてしまっただけです。それにしてもアイツもやるもんだ。どうやったらこんなにも強固なガードを施せるのやら」

最後は呟くように言った。

僕は意識が遠のく中、聞き逃さなかった。

「アイツとは誰のことなのです……。坂本先生、あなたは勘違いをしているのではないのか。それとも被害妄想者ですか」

つい声を荒げて言ってしまった。坂本晃三は終始表情を変えずにいる。

「夏岡さん、すいませんでした。相当お疲れのようだ。もう上がりましょう……」

気がつくとも僕はスカイライナーのシートに座っていた。まだ奈良史跡文化研究室の駐車場に停まっている。

あの後、何とか車まで戻ってきたようだ。どのように坂本晃三と別れたのかもあまり覚えていない。酷い頭痛と吐き気であまり記憶がないのだ。

それにしても、あのドーム状の部屋は何なのだろうか。何故、公になつていないのだろうか。それに、あの場で込み上げてくる奇妙な感覚は一体何だったのだろうか。まるで見てはいけないようなものを見てしまったような恐怖心と……、そう、あきらめとでも言うのだろうか。

僕はポケットからタバコを取り出した。一緒に紙切れが出てきた。それは出かける前にポケットに押し込んだ薄青色の紙だった。

この歳になって初めて貰ったラブレターかもしれない。少し緊張しながら紙を広げる。

『おはようございます。毎朝お会いしますよね。この電車で初めてお見受けしてから二年くらいになります。前々から一度お話をしたいと思っておりました』

この手紙の主は、毎朝電車で会う彼女からだとわかった。いや、既にそんな気がしていた。でも、直感的にラブレターではないと思つた。

『……あなたの左薬指に指輪があることからご結婚されていること、察しておりますが、

どうか一度二人だけでお話しさせていただけませんか。ご迷惑はおかけしませんので、よろしくお願ひいたします』
最後にこう書かれていた。

『未下香子』

ミシタ・キョウコ？

あの『タントウ、ミシタ・キョウコ』と同じ名前じゃないか。同一人物にしては話がうま過ぎると思う。偶然なのだろうか。いや、漢字まで合致する同姓同名なんてそう滅多にいないはずだ。

すると、あのメールマガジンは彼女の仕業と言っている。奈良史跡文化研究室と何か接点がありそうだ。

僕も彼女と二人きりで話がしたくなってきたのだった。でもその前にやっておかねばならないことがある。

続く